
血族 / Red ver . technical target

天城 百於馨

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

血族 / Red ver . technical target

【Nコード】

N9701D

【作者名】

天城 百於馨

【あらすじ】

『血族』第二弾。別バージョンです！犯罪組織ファミリに育てられた少年レッド。彼には同時三感起動能力という特殊能力があった。彼の能力に目を付けた父は彼の射撃コーチにスナイパーを付ける。その人物は何か秘密を持っていた。レッドをターゲットにする父親とスカウトマン。そして、レットがターゲットにするのは……！？（ブラッドとレットが最終場面で合流します）

血族 / Red ver. technical target

(前書き)

後半に補足、部分修正をしました。

人口受精させた二つの卵子にそれぞれ別の遺伝子を組み込ませ、同時に妊娠させた

人類史上初の遺伝子操作双生児

同じ姿にして、能力の違う遺伝子を持つ

一方は知性、第六感に長けた遺伝子を

一方は洞察力に長けた遺伝子を

こうして誕生した二つの命

彼らはレッドとブラッドと名付けられ、互いの存在を知ることが許されなかった

神の創造物でありながら、人為的に作り替えられたものの造形生まれながらにして罪深き子、レッドとブラッド

これを記したのはルパート・L・クリザリング。記述に示された双子の伯父、その人である。

「また外した……」

ここはとあるカジノバー。あと一つ絵を揃えられず、スロットマシンに舌打ちする女性の姿があった。紺色のワンピースに似た丸い開襟のトレンチコートを着て、付属のベルトを腰でリボン結びにし

ている。金髪の背中にまで届くロングヘアに、活発そうに生き生きと輝くブラウンの瞳と艶やかなピンク色の唇は、可憐かつ、か弱い人形のように繊細だ。

一見して美女。その横から覗き混む、革のジャケットにデニム姿の若い男性は恋人に見えるはずだ。

「何でタイミングを合わせないんだ？」

まるで出来て当然のことができなかったかのような口振りだった。男性のその少し意地悪な問い掛けに女性は皮肉を返す。

「ほどほどにしておかないと出入り禁止になるからね」

「ぎりぎりまでねばるつもりか？……勝負師だな」

男性は軽く笑った。それには悪戯な意味が込められていた。

女性の換金したコインは残り少ない枚数になっている。しかし、二人に焦りの色は見られなかった。それどころか、余裕すら感じさせる。

女性がコインをスロットに投入した。回転を始めると柄が一本の筋に見えてくる。時々見分けが付くが、視覚から動作へと脳が伝える信号は同時にはできない。そしてこのスロットマシン自体にも癖があつたりするから厄介だ。

「早く押せよ」

意識を集中させ、なかなかボタンを押そうとしない女性を見て、逸る気持ちを抑えきれなくなった男性が急かす。女性は何も答えずにリズムの狂った不思議なタイミングでボタンを押した。

横一列にチェリーの絵が並んだ。それを見た男性の片方の口角が僅かに上がったが、二人は無言でとくに何の反応も示さない。

再び女性の手が動いた。一瞬と言っても良いだろう。彼女の視覚が動きを捕らえ、同時に手がタイミングを計ってボタンを押していた。

「またチェリーか？……もつと別のを狙えよ」

男性の脱力したもどかしそうなヤジが飛ぶ。適当にも見える動きで女性の手がボタンを押した。

中央、右端、左、左端、右　回転するバーが押した順に速度を緩めて行く。

揃った。横一列の王冠の絵。それを見た男性の瞳が輝いた。

「よ　しっ！　いいぞ、次は7かBERだ！」

すっかり興奮した男性は急ぎ立てるように叫んだが

「やくめたっ」

「え？　何でやめちゃうんだよ！」

期待を裏切るような女性の言動に愕然となり、男性は情けない声をあげた。それを氣遣うこともなく、弄ぶように女性は微笑する。

その小悪魔的で小憎らしい笑みを見て、両掌を天井に向けてやれやれと嘆息を漏らす男性は、こんな彼女の気まぐれにも実は慣れていた。

「お次はどうします？　エリン」

立ち上がった彼女のイスを引き、紳士の所作を真似て男性が言った。

「エリン……？　まあいつか」

疑問符を浮かべながらも納得した彼女の名は　エリンではなかったが、とりあえずそういうことにしておいた。

「ルーレットでもやる？」

「だめだ。それじゃ、ただの“ギャンブル”にしかない」

彼女の提案に断固として彼は反対した。スロットをしておきながらよく言うなと思うかもしれないが、理由があるのだ。それはエリンに関係していた。

「酒でも飲むか」

フロアの中央に設けたカウンターには、白いウイングカラーのシヤツに蝶ネクタイを締め、黒のベストを着た寡黙な男性バーテンダーが食器を磨いていた。客の一人が彼に向かって相槌構わず、大袈裟な身振りで武勇伝を語っている。その横にいる男性は隣りの女性を熱心に口説いていた。

「やめとく。飲むと吐くから」

その光景を遠目に見ながら、エリンは怪訝そうに眉を寄せて首を横に振った。実際に吐くまで飲んだことはなかったが、まだ酒が美味しいと感じる域に達していない。あの苦みがどうしても好ましく思えなかった。

「じゃあ、ポーカールだな」

企むような笑みを浮かべ、男性がエリンの肩に手を置いた。カウンター横を二人が通過する時、女性を口説いていたはずの男性がエリンに目移りしたのは、若い男性にありがちな性^{さが}だろう。

「うっ……」

ウインクまでされて思わず顔を歪めるエリン。

「具合悪くなった……」

連れの男性もその様子を目撃するが、彼女を気遣うことなく笑った。

「そんな悪くなかったと思うけどな、結構ハンサムだったし」

語尾に嘲笑が混じっていた。

「やあ、お譲ちゃん。随分とツキが回ってるみたいだな」

彼らの目の前にゼブラ・ブロンド（褐色混じりの金髪）の男性が現れた。光沢のある紫色のシャツ、黒いフェイクレザーのズボン、ポイントッドトウの白い蛇皮の靴が妙にいやらしく、エリンは怪訝そうに眉を潜めた。

「うっ……相変わらず派手な奴」

趣味悪い……毒蛇か？

その顔に見覚えがあった。そして早急に立ち去りたかった。

「こんな所で何してる？」

威圧的に見下ろす彼の視線にエリンは顎を引いて目を逸らす。

災難だったとは大袈裟だが、どうしてこうも自分の命運は平均して一定なのだろう。一日がラッキーだけで終わったためしがない。せつかく娯楽のひと時を謳歌し、快哉の一日を過ごせたと神に感謝するはずだったのに……台無しだ！

心の中でぶつくさ文句を言い、舌打ちするエリンであった。

「お子ちゃまは、さっさと家に帰ってねんねしな」

男性が詰め寄り、耳元で囁く。

「イカサマ” なんだからよ」

「!？」

カチンときたエリンは絞め殺さんばかりの衝動に駆られる。拳を堅く握り締め、掌には爪が食い込んでいた。本来、穏和な性格の彼女は動く一歩手前で自己を抑制し、理性と狂気の葛藤を繰り返す。

腕力では敵わない。かといって……こんなに笑顔がムカつく奴はいない！ 一発ぐらい“ お見舞い” してやってもバチは当たらないはずだ。

エリンは彼ににじり寄った。

「何だ。やるか？」

彼からブルガリ・プールオムの香水が匂い立った。それは女を引き寄せるフェロモンのように空气中を彷徨する。大胸筋を覗かせるシャツの下で首にぶら下がる金色のチェーンネックレスは、盛りが付いた獐猛なドーベルマンに高級な首輪を嵌めてやったみたいだ。

彼の成す総てがいやらしかった。言動、服装、趣味、総てに嫌悪する。見ているだけでも不愉快だったが、黙ってこのまま帰るわけにはいかない “イカサマ” だと言われたことだけはどうしても許すことができなかった。

「……っ」

殺気立つエリンの髪が文字通り逆立ちそうになる。連れの男性はその心中を察していた。

「帰ろうぜ……」

彼女を制するその声には疲れの色が混じっていた。気怠い^{けたる}表情ながらもすっかりさっきまでの熱が冷めてしまったと伺る。揉め事を起こすまいと彼女の肩に触れる手に、少しずつ力が加わっていった。

男性がエリンに歩み寄る。警戒したエリンは後退した。

「なかなか上手くなっただな」

彼女の髪の毛のフロント部分を掻き分け、額を覗かせる。

「うわっ！」

エリンは慌てて額を隠し、頭を押さえた。

「ふっ……」

男性は傾けるように顎を上げ、斜め上から蔑むように彼女を見下ろし、悪気たつぷりな笑みを見せた。

「だが、この程度じゃあバレバレだ。入口で止められなかったことは褒めてやるが、オレにはガキにしか見えない。もっと研究してオレにもバレないようにしろ。騙すなら、まずは“身内から”って言うしな」

「……！」

身内……

こいつ……っ!?!?

悔しさでエリンの眉間に皺が寄り、普段は決して見せないような形相になった。ふっふつと込み上げる怒り、簡単に見破られたことへの屈辱が、行き場のない感情の渦となって彼女の中に蓄積されて行く。自制という名の防波堤には既に大きな亀裂が生じていた。

こんな奴が……！

何よりも、思い返すことすら身震いする事実があった。それを知った時、耳は塞ぎ、目は覆いたくなるような極度の悪寒と拒絶反応が巻き起こった。しかし、その事実は永遠に変えられぬことだった。

『死ぬまで変わらない“刻印”』 とエリンは解釈する。

「家までちゃんと帰れるか？ お兄さんが送ってあげまちょうか？」

どこまでもしつこい彼の挑発だった。完全にエリンを煽ることを楽しんでいるとしか思えない。

「っ……っ!?!?!」

エリンは攻撃する代わりに鋭く彼を睨み返した。

「相手にするな」

連れの男性が嗜め、引きずるようにエリンを誘導した。

「偉そうにしゃがって……」

引きずられながら遠ざかる男性に向かって

『ファック・ユー!』

親指を立てて顎の下を横に引き、直角に切るように胸の前から下ろす。憎しみを込めた侮蔑のサインだ。(絶対に真似してはいけません)

出口へ向かうにつれ、店内に流れるジャズのBGMも遠ざかる。

ジャズピアノが短く上品にトリルした。サクスのビフラー、コントラバスの緩やかなベース音が混ざり合い 誘惑した。

「つつつ……」

その音を背に、込み上げる怒りを堪えながらエリンは肩を震わせていた。

二人は地下にあった店を出るとエレベーターで地上に上がり、屋外の駐車場へと向かった。

途中、エリンの怒りが爆発する。

ほんの息抜き程度に来ただけなのに、荒稼ぎしていたわけでもないのに、何で追い出されなきゃいけないんだ！ 余計ストレスが溜まっただけじゃないか……つつ！？

「ああ……くそ！」

一言では言い尽くしようのない憤りに、ただ一声上げ、頭をくしゃくしゃにするエリンだった。

「ははは」

連れの男性は乾いた笑い声で受け流す。

連れの男性が乗り付けてきた車の鍵を開けると、すぐさまエリンは後部座席に陣取った。

「やってらんないぜ！」

と勇ましい勢いで、髪を鷲掴みにむしり取る。

金髪の下からココア色の髪が現れた。

「そのメイクで外すと妙だぜ“レッド”」

男性がバックミラーに目をやった。後部座席に腕をかけて車をバツクさせ、ハンドルを素早く切り返ししながら苦笑する。

「……」

むくれた表情で黙り込むのは

エリンではなかった。金髪の女性を演じていた“レッド”という少年だった。

地面を揺るがす唸るようなエンジンの低音を轟かせ、男性は豪快にジャガーを発進させた。

「思い出しただけで腹が立つ！」

触发されたようにレッドも唸る。

「そう熱くなるなよ。下手なジョークを言われたと思って聞き流してりゃいいんだ、あんなのは」

ハンドルを握る男性はあくまでも穏やかに嗜める。レッドとは同業者の彼はエリックといい、満十七歳のレイト・ティーンだ。三歳下のレッドのことは生まれたときからよく知っている。さっきの男性を毛嫌いする理由もだった。

「あんな奴が親戚だなんて……クリザリング家は呪われてるよ」

冗談とも本気ともとれる皮肉を吐くレッド。彼は頭を振りながら、後部座席の窓を数センチ開け、そこから流れ込む風で気を静めた。

直線道路に入るとエリックはギアをチェンジした。猛獣が荒い鼻息で威嚇するようにエンジン音を轟かせ、一気にジャガーは加速した。時速九十キロをメーターが振り切り、レッドの髪が一気に後ろに煽られる。エリックは気持ち良さそうに雄叫びを上げた。彼にこの道路は短かすぎる。アメリカのハイウェイぐらいないといけない

なとレッドは思う。

高速の夜風に吹かれ、完全冷却された髪が落ちる間もなく、しきりに揺れていた。その下の肌も冷たくなってきたので、レッドはボタンを押して窓を閉めた。

さつき衝突していた男性は彼らと同業者で、別の一家のボスの息子だ。そのファミリー（犯罪組織）は頭脳派で、詐欺師集団として地味に活動している。法をかき潜るためだけに法律を学び、政治家などの闇金を動かす橋渡し役として影に君臨し、活動は他犯罪組織との共存を図るため、制限していた。そのファミリーの中で彼はガンマン、詐欺師などのスカウトマンを任されていた。才知に恵まれず、銃の腕にも乏しい彼に唯一与えられた情けの役目と言ってもいいだろう。

しかし、それが功を奏したのか、彼が見付けてきた人材は優秀者ばかりだった。その彼が次なるターゲットに選んだのが“レッド”なのだ。

レッドより十歳以上も年上の青年 “ウォルター”、それが彼の名だった。

彼とレッドが出会ったのは、とあるバー……

<二年前>

エディンバラの町外れにある白塗りのプレハブ小屋に簡素な看板を下げただけの造り。その店の片隅で四角い木製のテーブルを囲んでランプをする連中の姿があった。

「くっそ〜やられた！」

「まったく、お前は末恐ろしいガキだなあ、レッド」

大の大人達が観念して唸り声を上げている。その中に一人の少年が混ざっていた。一見して普通の少年だったが、同席する大人達は

柄が悪く、どこかうさん臭い連中ばかりだ。ベージユのテンガロンハットを被った男、葉巻を啜え、わいせつな英単語をプリントしたTシャツを着た男、無精髭を生やして黒いニット帽を被った男。配色こそ目立たなかったが、そこだけ異質で近寄りがたいオーラのようなものを発している。

「いらつしやいませ」

ドアベルの鳴る音が店内に響き、一人の客が訪れた。赤いシャツにジーンズ姿の若い男性だった。

髭面のマスターのよそ者を訝るような眼差しが光る。男性はわざとらしく金色の髪を掻き上げ、左手首に填めたゴールド加工の時計を閃かせた。

『金ならあるぞ』

の主張だった。

「ふん」

マスターは鼻を鳴らし、彼から目線を外す。男性はカウンターの空席に腰を下ろし、ダイキリを注文した。店内には聞いたこともないBGMが流れていた。ウクレレに似たエリキギターの軽快な旋律に乗って男性がコミカルに歌っている賑やかな歌だ。

「兄ちゃん！」

突然、テンガロンハットを被った男性が彼に声をかけた。手招きされ、仕方なく若い男性 青年は席を立つ。

「そいつを後ろから見張っててくんねえか。もし、小細工でもしたらすぐに教えるよ」

わけも分からず少年の後ろに立たされる。同席の大人達の表情は真剣だった。子供相手に何をそんなに向きになる必要があるのかと半ば呆れる。

しかし、不可思議な現象を次々と目の当たりにした。

「おい、兄ちゃん。ちゃんと見てたか!？」

「あ、ああ……」

少年は延々とゲームに勝ち続けたのである。何度見ても細工らし

き疑いは確認できなかった。まるで機械のように、数学の公式を解くように、相手が出す手札が何であるかを導き出しているようだった。その的中率は相手が負けを重ねることに上がっていく。

読心術ができるのか？……

青年はそんなことを思ったりもしたが、予想するにもトランプでは種類が多いため、特定しづらい。訝りながらテーブルの下を覗いてみるが、隠しミラーなどの細工などはいっさい見られず

「何してるの？ お兄さん」

と無邪気な笑顔を返されるだけだった。

この出来事は青年“ウォルター”の脳裏に強烈に焼き付いた。少年“レッド”の持つ未知なる能力と可能性に彼は完全に魅せられてしまったのである。

一方、当人のレッドはというと、この時の記憶は極めて薄かった。青年がどんな顔をしていたのかも全く気にも止めておらず、思い起こすことすらなくなっていった。

それから約一年半が経過した頃……

「主よ。どうか我が身をお守りください」

ロザリオを首に吊るし、アジトの一室に設けた祈祷台の上に手を組み合わせてそう呟き、十字を切る。父親のカドマスは敬虔な信者カトリックでもないのに縁起を担ぐためか、日曜は決まってそのように形だけの祈りを捧げていた。

神様も大変だ。犯罪に手を染めた人間の願いまで聞かなきゃならないなんて……

祈祷する父の傍らで同じく形だけの祈りを捧げながら、レッドは

心の中で皮肉った。

イギリスに拠点を置くマフィアやギャングに混じって、ウルフガンク一家は存在している。レッドの父親はそのボスだ。半年ほど前ボスを務めていた祖父のアーロンが持病の心不全を患って他界してから、遺言に従って後任したのである。

「レッド、お前は変装を覚えたほうがいいな。この業界の人間としては特徴のない顔のほうが目立たなくて良かったが、お前の顔は一目を引くかもしれん」

「変装ね……」

レッドは意外とそれに興味を持ったのだが、彼の想像とは違っていた。

「お前はまだ小柄だし、そうだなあ……女装するのがいいだろう」「女装？」

驚いたというよりレッドは啞然とした。

「やり方は“エイブ”に教わるといい」

エイブというのはウルフガンク一家の一員で、元特種メイクアーティストの男性だ。彼の手に掛ければ人間を類人猿に、男性を老婆に変えることだって可能だ。

「なかなか面白そうだね」

行動範囲が広がるな

あれこれ企みながら、一人ほくそ笑むレッドだった。

この後レッドは射撃の練習をする予定だった。珍しく父に先導され、屋内に設けた射撃場へと向かう。

ウルフガンク一家の人間はあまりそこで練習はしないのだが、時々誰となく試し撃ちに利用していた。

レッドは武器庫から32口径の軽量な拳銃を持ち出し、シヨルダールホルスターに収めた。

「銃の扱いには、もうなれたのか？」

「まあ、的に当ててるのはね」

「そうか」

父親は何か含むようにそう頷くと言葉を紡いだ。

「場合によつては人間のほうが当てやすいかもしれん。人間は銃を向けられると勝手に止まってくれたり、面積が広い分、当てやすい。動くといつてもたかが知れている」

破顔する彼の薄茶色の瞳は、中高年に見られる刻まれた時間の深みと、裏社会で生きてきた人間の冷淡な色が沈着していた。

射撃場の重厚な鉄扉を開けると銃声が出た。どうやら先客がいたらしい。端寄りのコーズに長身の男性の後ろ姿があった。彼はリボルバーの輪胴式弾倉を回転させて弾を装填し、的に向けてトリガーを引いた。

それは見事に的の中央付近に命中した。

「へえ〜やるじゃないか」

一目でレッドは興味を引いた。その男性の鮮やかな射撃は

照準器サイトを覗く 狙いを定める 撃つ をほぼ同時、もしくは

は身体に染み付いた感覚で行っていた。レッドはその優れた技術と自分の持つ同時三感（見る、判断する、動く）起動能力という特殊能力とを重ね、彼に親近感が湧いていた。

「あれは狙撃者スナイパーだ。お前の射撃のコーチをしてもらうことにした」

値踏みするような目で男性を見やりながら父が言った。

「へえ〜、狙撃者スナイパーか。結構、報酬ギャラが高そうな人をコーチに選んだね？」

「まあ……だが、お前に早く一人前になつてもらつたためだ」

苦笑が混じるその根底には、ボスを任された責任感への押しつぶされそうな現状から早く抜け出したいという心理があった。

彼は臆病になっていた。頂点に立つものは狙われる。そのことに苛まれ続けていたのだ。早く世代交代をしなければならぬ。息子のレッドには才能がある。早く一人前に育て上げ、この座を譲らねば……

この真意を誰も知らない。彼は延々と頂点に君臨するべくボスとして、威厳をふりまかなければならぬ。それを悟られぬうちに……逸る気持ちを包み隠し、その真意は固いプライドという甲羅に覆われた胸中の奥に満ちていた。

「彼はフリーの狙撃者^{スナイパー}で、コードネームは羽音という意味の“Wings”^{ウィングス}だ」

「羽音？」

「虫の羽音のように静かな犯行　そこから付けたネームらしい」

「ふ〜ん」

「技術者としては申し分ないはずだ」

「そうだね。それに……男女種別問わず、美しいものは好きだよ。」

“Wings”か……気に入った」

念願の商品を手に入れたかのように、レッドは満足気な笑みを浮かべた。

「私は用事があるから、港に行く」

そう言っつて父は射撃場から出て行った。

港で……行き先を不明確にしか言わなかったが、おそらくコカインや麻薬などの密売取引か、女にでも会うのだろうとレッドは予想した。

一家に女の影はない。この仕事に女は邪魔だと先代が偏見を持っていたからだ。レッドの父親はそれに対し疑問を感じることも、反論することもなかった。彼は仕事と女遊びを分けている。行く先々で違う女と関係を持つ　それが自分にも相手にも都合がいい。そういう後腐れない女しか抱かないし、そういう人間とは匂いで分かるものだ。見返りを気にせず、欲望のままに快楽を貪る。それは獣の発するムスクに似ていた。媚びることのない誘惑、残り香を残さ

ない官能的なロマンス。

いずれ歳をとれば、自分もああなるだろうとレッドは思う。

「ハロー」

レッドは好感的な笑みを浮かべながら、射撃をしている男性に近付いた。

「……」

男性は振り向き、握っていたリボルバーをホルスターに収めた。

銀色のフレームに黒の銃把が特徴のそれはS&W60（スミス・ア
ンド・ウェッソン）だ。

「僕はレッド。射撃のコーチをよろしくお願いします。ミスター・
ウイングス」

「はじめまして」

握手してみると“ウイングス”の掌はゴツゴツしたものでな
く、傷も見当たらなかった。

これが狙撃者スナイパーの手？

見れば見るほどその外見からは想像し難い。指が長く、ピアニス
トのそれにも見紛うほどだ。

それだけではなかった。彼の容姿その物が別格なのだ。筋肉質で
はあるが、すらりと伸びた長身、金糸のような光沢のある柔らかな
ハニーブロンド、それとは逆に氷上を思わせる清涼なグレーの瞳の
陰影。それはまさに光と影の見事な調和と言えるだろう。

「では、始めよう」

ウイングスが横に退き、レッドが的の正面に立つ。するとウイン
グスがある物をレッドに差し出した。

「リボルバー？ 僕にこれを使えって!？」

ただただ戸惑うレッドだった。彼が練習用に使っているのは小口
径の自動式拳銃だ。反動が小さく、的を捕らえやすいので気に入っ
ていた。その彼がこの重くて狂犬のように暴れて危険だと父に聞か
されたマグナム使用のリボルバーを使いこなせるわけがない。実戦
に利用できないような物を何故、練習用に使えと言うのか訳が分か

らなかった。

レッドは納得がいかない表情でウイングス（コーチ）を見るが「ここにそれしかなかったと思え」

と冷淡な言葉が返って来た。

「むちゃくちゃだ……」

もう一度ウイングスを見ると、彼は眉一つ動かさず、けっして険しい表情ではなかったが

『やれ』

目がそう言っていた。

「分かったよ……やればいいんでしょ……」

レッドは観念してリボルバーの残弾数を確認した。

「弾は三発入れている。全部撃つてもいいが、一発は的に当てる」

「……っ」

思わずレッドは顔を歪ませた。反動さえなければ当てる自信はあったが、何しろ馴染みのない型だ。だから『リボルバーは不得手だ。使いたくない』と言ったらどうなるだろう……

「反動は少し大きいが、そのうち慣れるだろう。まずは撃ってみろ」
美しい狙撃者スナイパーはレッドにその拒否権を与えてくれそうもない。

「……」

『沈黙』に『直視』という重圧で攻めてきた。

一発当てればいいんだろ？

「……っ！」

レッドはトリガーに指を掛けた。ダブルアクション式のやり方だ。慣れないせいもあるが狂犬リボルバー（レッド命名）のトリガーは堅かった。それを思い切り引いて銃鉄を起こす。輪胴が回転し、発射位置に弾が移動……

発砲した。

「っ！」

狂犬の名のごとく、飼い主（射主）の手から飛び上がりそうになる。レッドはそれを落とさぬよう、しっかりとグリップを握り締めていた。

「ちっ！」

弾は隣りのコースとの間隙をすり抜け、奥の闇に吸い込まれて行った。

「……………」

ウイングスは無発言（ノイコメント）だった。

アドバイスもなしか？

感情を全く表に出さないウイングスのその沈黙が嫌だった。

才能のある奴はどこか癖のあるもの……かな？ とレッドは強引に自分を納得させ、再度銃を構えた。

また暴れるんだろ、こいつ？

本来の力を発揮できないのがもどかしかったが、できないことが逆に彼の闘争心を掻き立てる。

“ 狂犬くん ” を手懐けてやるうじやないか……

ここからサイトで真正面を狙って撃ち、その反動で銃身が5センチほどぶれた。的から1メートル近く外れ、そのぶれを調整すると……

右手で顎を摘み、左手を反対側の腰に回す レッドが考えことをする時の癖だった。

「よし、この位置だ！」

レッドは決意を固めると移動した。先程より腰を落とし、やや左寄り斜めに身体を傾け銃を構えた。

すぐにズドン！ とは行かなかった。前回よりも慎重になる。

照準器（サイト）での中央地点を捕えると同時にトリガーが引かれた。

「良い姿勢だ（フォーム）」

言葉少ないウイングスの初めての賛辞か（？）

「何で……?」

しかし、惜しくもまた的を外してしまったレッドは頭を抱えて苦悩する。

「うまく距離を狭めたな。短時間でよくやった。だが “計算通り” に動くのは難しいだろ?」

ウイングスが微笑した。それは木漏れ日のように柔らかな笑みだったが、レッドは顔をしかめて長身の彼を下から睨み返す。

「痛いのか?」

レッドが無意識に触れていた親指にウイングスは目線を落とした。

「……別に」

「貸せ」

やせ我慢するレッドの手からウイングスがリボルバーを奪い取った。

「あつ?……」

その鮮やかな手捌きに成す術もなく、啞然とするレッド。

「見てろ」

そう言い、ウイングスがリボルバーの銃口を的に向けた。

「的の位置は照準器サイトのど真ん中だ。リボルバー（こいつ）は発射時、上に跳ね上がる。その位置を計算して撃つのも一つの方法だろう。

だが、持ち方を替えればぶれにくくなる。銃把の上部をしっかりと握

り 撃つ」

トリガーが引かれ、秒遅れで弾が飛び出した。

「……」

口を半開きにしたまま、レッドはそれを目で追いかける。

弾は的の中央付近の渦に吸い込まれて行った。

「……当たった」

呆気にとられるレッドだったが

「今日はこれで終わりだ。来週、オレが来る時まで、その手を休めておけ」

「もう終わり? やつとこつを教えてもらったのに……」

嫌だったはずなのに、急にやる気が沸いて来たレッドであった。
「その手が腱鞘炎にでもなったら練習どころじゃなくなる」

消炎器の冷め具合を確かめてから、リボルバーをホルスターに収めるウイングス。レッドは彼を引き止めたかったが

「オレはスパルタをしに来たわけじゃない。その手を大事にする」

最後の一言に、『こいつ、優しいのか冷たいのか分からない』

……と困惑するレッドだった。

さつさと射撃場を出て行くこうとするウイングスをレッドは追いかける。ウイングスは足が長く歩幅が広いので、レッドは軽く小走りした。

「ねえ、“コーチ”」

ウイングスが立ち止まって振り返る。

「フリーの狙撃者^{スナイパー}だって聞いたけど、どこにも所属してないってこと？」

「そつだ」

「あれだけの腕があるなら、どこかに入れればいいのに……宝の持ち腐れだなあ」

コーチとしてだけでなく、ファミリーの護身用として是非ともウルフ GANG（うち）に来てほしいものだ、とレッドは思った。

「うちに来れば？ 僕が推薦するよ」

ウルフ GANG 一家に所属する人物は皆、“元^{もと}” という肩書き^{スナイ}を持つている。その中に“元陸軍出身”で自称ウルフ GANG の狙撃^{スナイ}者^バ担当の男がいるが……

アル中だ。それに歳もかなり行って、いつ死んでもおかしくない。全く頼りにならない存在だ。

「考えてみてほしいな」

レッドはあえて控え目に頼んでみた。とりあえず最初は耳に入れておく程度でいい。徐々に好条件を出して引き寄せるつもりだった。ウイングスが床に視線を落とす。密集した長い睫毛が、下瞼に影

を落としました。

「この仕事はもう引退するんだ」

「え……？」

「オレはある目的のためにこの仕事を始めた。その目的がもうすぐで達成する」

「目的って何？」

「それは言えない」

「……」

錠前が下ろされた。他人からの一切の介入を遮断する見えない鉄格子が、ウイングスの私情を完全に保護ガードしていた。

美しいこの狙撃者スナイパーには冷静さとどこか“哀しい色”がある。彼の言う目的と関係があるのかもしれない。

それは犯罪者の目に宿る腐敗した色ではなく

『純粹な悪の結晶』

そんな色だった。

ウイングス

何を“隠してる”……？

彼がコーチの狙撃教習はその後も何度か行われた。

「飲込みが早いな。もう、教えることはない」

そう言われるのに一月とかがからなかった。

レッドにとってウイングスの射撃は理想だった。芸術の域に達しているときえ思った。彼はそれを自分のものにしようとした。ウイングスの姿勢、銃の持ち方を特技であるあの特殊能力を使って、ま

るでコピーしたように自分の身体に技術として取り込んだ。

「目的はもう達成したの？」

既に技術を手に入れたレッドはゆとりの笑みを浮かべて尋ねた。

「いや、もうすぐだ」

ウイングスも笑みを返す。

それは互いに別の思考を抱きながら、対立するような笑みだった。

ウイングスという射撃のコーチがいなくなつてから、レッドは自動式拳銃しか使わなくなつた。時々反動で体が吹っ飛びそうになるような威力を持つ銃器をいじっていると

「お前に必要なのは威力のある銃ではない。技術を磨け！」と父に叱られた。レッドはそんな父を見ているとおかしかった。

「パパ、何をそんなに焦っているの？」

心の中で、そう呟く……

「これで撃てば、あの狙撃者スナイパーにも勝てるかな……」

レッドはアジトの武器庫に置いてあつた自動式拳銃　デザートイーグルを手に取り、独語した。番犬を撫でる飼い主のように“それ”を視線で撫で回す。

あいつのWings（翼）をこれで……

撃ち落とせるかな？

「ふふ……」

レッドはじつくりと思考の中で味わいながら、薄っすらと笑みを浮かべた。

彼はウイングスの技術を模写した。だが、あの才能が妬ましい。ウイングスはレッドの技術を認めたが、レッドには満足がいかなかった。自分は彼の真似をしているだけにしか思えなかったのだ。

ここにいてくれたら許してあげたのに……

その妬みは憎悪に変わりつつあった。

「ここにいたか」

父の声がしてレッドは振り向いた。何やら良い知らせでも持ってきたのか、口の端から笑みが零れていた。

「ロンドンに行つて来い」

「ロンドン？」

改めて行く様な所なのか？ と思い、レッドは問い返す。

「面白いものが見られるぞ……」

父は不気味な眼をしてそう答えた。

レッドは生まれてからずっとウルフガンゲ一家にいた。自分の境遇というものに苛むようなことは一切無かった。母親はいなくともここまで育った。これが馴染みの、彼にとっては安住の地だ。そう思っていた……

「お前と同じ姿の遺伝子操作双子がロンドンに住んでいる。そいつを捕まえろ」

自分のこの特殊能力が遺伝子操作によるものだということは聞かされていた。それを誇らしいとさえ思った。普通の人間を睥睨することができる、そんな気がしたからだ。それが……

もとは同じ遺伝子を持つ双子となりえた人間が、一般社会という平穏な世界の中で暮らしていると言う。

自分だけが悪に染められ……

『二つの能力を一つの力にするんだレッド。彼とお前は二つで完成形なんだ』

父が言ったその言葉は暗示のようだった。

レッドはその暗示にはかからなかったが 利用してやる そう決めた。同じ濁ったとどす黒い闇世界に住まわせる。彼だけに平穏な暮らしを与えはしない。必ずそれを壊してやると……

薄く灰色を帯びた空が驟雨の前触れのような肌寒い午後の日、レッドはロンドンの地に降り立った。この時、父の言っていたあの“少年”がここを訪れることは調べ済みだった。

「来たぞ」

男がそう告げた。彼に追跡させていたのである。レッドがチップを渡し、彼は鼠のように素早い動きでどこかへと散って行った。

レッドは通行人を装った。完全に景色の中に溶け込む。不自然さは全く感じられないだろう “普通の人間”の目には……

レッドは石畳を歩き出した。反対方向から来る人の中に……

見付けたよ

僕の“分身”

『ブラッド・クリザリング』

レッドは微笑した。左指で顎を摘み、右手を反対側の腰に回す。

値踏みするような目で見詰めた。

「……」

「……!?!」

それに気付いた“少年”の表情は蒼白した。それは決して見てはならないものを見てしまったかのように絶望的な色。

“少年”は背を向けて駆け出した。

逃げちゃった……

レッドは愉快気に笑みを零し、その後ろ姿を目で追うように眺めていた……

(後書き)

もちろん続きがありますから、 『途中で終わってる』 なんて言
わないでくださいね(汗

次回、第三弾で対決するのは……！？

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9701d/>

血族 / Red ver. technical target

2009年3月27日06時03分発行